

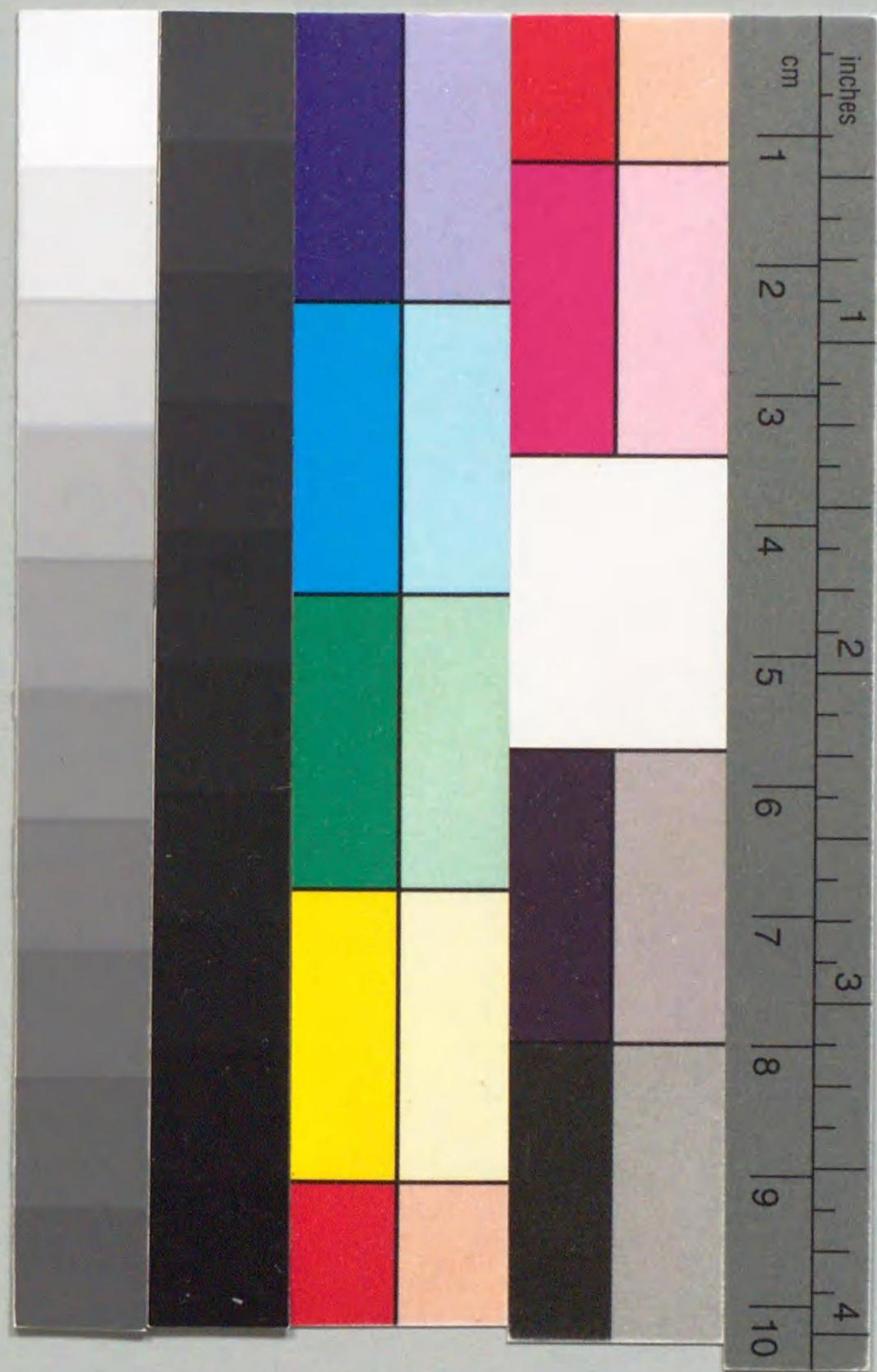
集註  
美以久佐

KH378-H5



\*1200701564300\*

室有厚焉

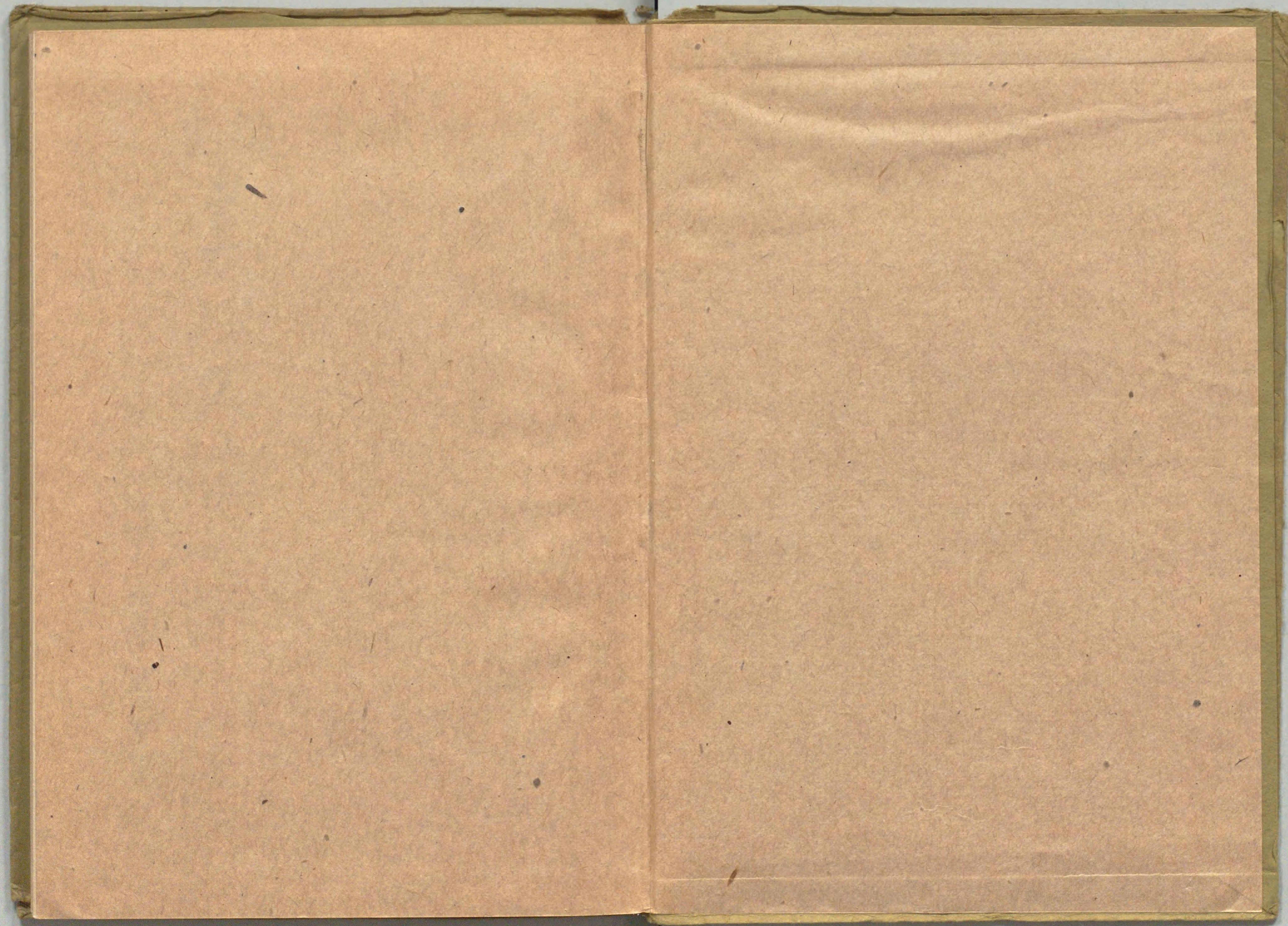




詩集  
美以久佐

室有厚香







詩集  
美以久佐

昭和十八初夏

厚岸著

千歲書房刊



KH378

H5

序

詩

真  
美  
人  
詩



I 種

W



\*1200701564300\*







みいくさは勝たせたまへ  
つはものにつつがなかれ  
みいくさは勝たせたまへ  
もろ人<sup>びと</sup>はみないのりたまへ  
みいくさは勝たせたまへ。

食ふべくは芋はふとり

銃後ゆたかなれば

みいくさびとよ安らかなれ

みいくさは勝たせたまへ。



かくくさは勝たせたまへ  
 るんちお頼式甘式をへ  
 つはものにつがなかれ  
 むんちちぬうし突さ成る  
 むいくさは勝たせたまへ  
 頼式成る味  
 もる人はみないのうたまへ  
 食えんお芋おえうも  
 みいくさは勝たせたまへ

日本での諸落 ..... 二

年一十八日 ..... 六

田の畑 ..... 四

みいくさ 目次

日本 ..... 三

乳 ..... 一



序 詩

日本の歌

みいくさを詠める

臣らの歌……………四

十二月八日……………八

マニラ陥落……………二

日本の朝……………二六

怒濤……………三

ふたたびその日……………二四

遠天……………三〇

シンガポール陥落す……………三



みいくさ

銃後を詠める

勝たせたまへ

日本の歌

今年の春

夜半の文

女性大歌

天

銃

詠

め

る

る

る

る

る

る

る

る

る

る

る

る

五〇

四二

四六

五〇

五四

哀笛集

さけがたきもろもろの哀歌

よもすがら

生きのびし人

静か居

よ

も

す

が

ら

ら

ら

ら

ら

ら

ら

ら

ら

ら

ら

ら

六五

七一

七七



野のものゝの歌

主ち野人生計

歴史の祭典

皇紀二千六百年奉祝日に

希望の正體

きりぎりす

磯濱

三

二

八四

六五

九二

九四

九六

天才の世界

乳緑の古典

野に記されたもの

乏しき青果をかざりて

えにしあらば

みみずあはれ

野のものゝの歌

九六

一〇〇

一〇四

一〇八

一一〇

一一三

一一四



蠅の歌

續野人生計

僕の庭 ..... 一三三

僕の家 ..... 一三四

市井 ..... 一三六

行春 ..... 一三八

麗日 ..... 一三三

塵勞 ..... 一三四

少年行 ..... 一三五

山ざと

生ける鮎 十首

..... 一四三

哀歌

街の歌 九首

..... 一五一

あらいそ集

乏しき炭火 十七首

..... 一五九



日本の歌

鐘の歌

終明尾機歌 十首

もよおしの集

僕の家

市井の想 共首

哀

行燈

露

玉ける湖 十首

山

ちよ

装幀 著 者

一五 一六 一七 一八 一九



みいくさを詠める



臣らの歌

宮城の廣場に  
砂利の上にみんなは外套を脱ぎ  
帽子を置き  
一列にならび

森として頭を垂れた  
みんなは少時頭をあげなかつた  
みづらみのやうな静けさ  
臣のころ  
臣のいのち  
臣の息づかひは  
かくてあたたかに結ばれた。



臣らは宮城をことほぎ  
宮城をめぐる伽藍に似た森林に  
すゞしくひとみをそそいだ  
やがて外套をひろひ  
四列になり  
宮城の廣場を過ぎた。  
さきにあるいて行つたときと  
いまかへりつつある氣持と  
そしてこんなにいそいそした  
みんなの快よい歩みはどうだ

その日 臣らはうたつた。  
臣らのこゑはひろがつた。  
きみが代の歌  
千代に八千代の歌  
さざれいはほの歌  
われもまたかすれたる聲にて唱へり  
たらちねの日もたまゆら  
わらべの日もつかのま立ちもどり  
臣らはうたつた  
臣ら文をなすものの聲はひびいた。



十二月八日

何かを言ひあらはさうとする者

そして言ひあらはせない者

よろこびの大きさに打たれて

そこで凝乎として喜んでゐる者

よろこび過ぎて言葉を失つた瞬間

人ははじめて自分の我慾をなくし

何とかして

偉大な喜びをあらはしたいとあせる

勝利を自分のものにするのは勿體ない



それを何かで表はしたい。  
何かをつくり上げたい  
繪も彫刻も音楽も  
そして文學も勝利にぶら下がる  
何かをつくり  
何かをゑがき  
自分のよろこびを人に示したい

自分も臣の一人であり  
臣のいのちをまもり  
それゆえに壽をつくり上げたい、  
菲才いま至らずなどは云はない、  
この日何かをつくり  
何かをのこしたい、  
文學の徒の一人としてそれをなし遂げたいのだ。



マニラ陥落

榮光 十二月八日、

あの日から幾日経つたか、

あの日から何を我々は考へたか

あの日から世界の國々の眼が、

どんなふうに見直したか、

グアムは陥ち

ウエーキも陥ち

つひに香港をも陥し入れた。

そして怒りに怒つた軍靴は突進した、

マレーへ

英領ボルネオへ

シンガポールへ

砲は砲を抱き

機は機を招き

艦は艦列を敷き



齒と齒はカチカチ鳴り

マニラへ

つひにマニラをも袋叩きにした、

マニラは藁もやしのやうに崩れた、

思うても見よ

我々の祖母が秋の夜の賃取仕事に

ほそい悲しいマニラ麻の紵をつなぎ

それら凡てを搾取したあのマニラ、

死んだ多くの祖母よ 母だちよ

あなた方を賃仕事でくるしめた

マニラに日本の旗が翻つた、

祖母よ 母よ 姉よ

むかし天長節だけに見られた

日の丸の旗がマニラの頂いたきに建たつた、

あなた方の孫達が戦つたのだ、

さあ 表に出て云はう、

有難うとお禮をいはうではないか。



日本の朝

あの日の天そらを見たか  
あの日から天そらの廻かに何が起つてゐたか、  
あれから一月餘、  
澄み切つた氷の上に

何がきらめいて合圖をしたか、  
あの日から毎朝、  
飯をくふ間も放さないのは何か、  
白い紙の家に住み  
白菊の垣根を結うてゐた若人わかうとは  
みな天そらの梯子を登つて行つた、  
そして足つぎの梯子を蹶飛ばした、



かれらは鶴のやうに美しく  
鶴のやうに火を吐いた。  
あの日からその妹達は  
さがが三角になつた黒の頭布をかむり  
白いちもてをつつんで天そらを見てゐる、  
そのよい匂におひを天そらに贈りながら。  
あの日から日本の土に  
日本の地圖がどういうふうに殖えたか、

どういふ樹々の花々  
どういふ鳥と魚とが泳ぎ出したか、  
優しい街の靴は脱がれ、  
若人わかひとらは鐵の帽子と  
鉾こだらけの靴と  
砲列と  
軍歌と  
呐喊と



勝関と

そして土をゆるがして進んだ

マレーへ

シンガポールへ

火と水へ

未来へ

そして日本はふくれた

ふくれるだけ日本はふくれた

ふくれた日本よ

一どきに寶物を吐き出した日本よ

戦へる寶

同胞よ。



怒

濤

ひと日 海にいたる

怒濤のしぶきを見んため

怒濤の果をあふぎ見んため

見えざる果に何かを見んため

おのがこころをひきしめて見んため

戦雲漠々のあなたに君を見んため

我は我を教へさとさんため

ひと日 海にいたる

波は濁りてくらく

歳は寒くくれんとして怒濤は語る

怒濤はおほくを語れり。

我は耳を澄して聴けり。

我は手をあげて怒濤をたたへり。



ふたゝびその日

この日はつひに何ものこさずにくれた、  
この日の人間のころは  
そのまま 明日まで持ち越した、  
そしてその日のころは

さらにその翌日につゞき  
翌日はそのつぎの日にかがやきを  
うち延した、  
我々はいきかへつて  
あたらしい息づかひをはじめたことを知り  
憂鬱など吹つ飛ばした、  
みんなの頬はまつかだつた、



眼は半分笑ひ  
半分は怒つてゐた、  
そしてそのつぎの日はさらにそのつぎの  
偉大な勝利をくりかへして  
また鶴のやうなつばさをつぎの日に  
蜿々としてうちつゞけた、  
どこまで續くか分らず、  
どこまで強剛なるか分らず、  
艦は龍のごとく

怒濤はひらがなの和歌をのせ  
やさしいものの怒りをおしひろげた、  
あんなに優しかつたもの  
あんなに恐ろしいちからを見せようとは、  
やつらはゆめにも知らなかつたであらう、  
優しいものはもう怒つて了つた、  
怒つたら怒りの解けるまで怒り切るだらう、  
怒つて怒り飛ばすであらう、



それは何ものも支へきれない怒りであり、  
 對手を打ち懲らす、  
 起ち上れないまでに叩きのめす、  
 嘗つてあんなに優しかつたものをおもへ、  
 そしてその優しさにはぐれた  
 やつらはふたたびその優しさを  
 美しすぎるものをほしがつて  
 へり降つて來る時があるだらう、

その日まで  
 日は日を次いで  
 あらがねの怒りとなつて戦ふであらう、  
 怒りは怒りを縋ひ  
 怒りは怒りを呼びあひ、  
 輾轉たる戦ひのくるまを押し寄せる。



遠

天

ひもすがら  
遠き飛行機かすみ  
ややありてまたあらはれ

わが庭のそらを過ぎたり、  
誰びとの乗れるものならん、  
誰びとの心怒りて  
つばさ飛ばさんとするものか、  
日もすがらおほぞらにありて  
怒り馳りて  
そのをと絶ゆることなし。



シンガポール陥落す

皇軍向ふところ敵なし、  
進撃また進撃、  
砲火虹のごとく  
マレーを陥し入れ

香港を打ち抜き  
怒濤は天に逆捲き  
敵據地シンガポールを屠る。  
この日  
日本はしんとして  
その父と母とはうち寄り  
すめらみくにのみいづを説く



こどもらよ

兄よ

妹よ

ゆめにはあらず

シンガポールの陥ちたり

ことほぎまつれ

つはものを讃へよ

歴史にもかゞやけ

シンガポールの燈火は消えたり

シンガポールは陥ちたり

シンガポールに日のみ旗立てり。

百年の魔の都

シンガポールは陥落せり。



み

い

く

さ



銃後をよめる



勝たせたまへ

みいくさは勝たせたまへ  
つはものにつつがなかれ  
みいくさは勝たせたまへ

もろ人はみないのりたまへ  
みいくさは勝たせたまへ。  
食ふべくは芋はふとり  
銃後ゆたかなれば  
みいくさびとよ安らかなれ  
みいくさは勝たせたまへ。



日本の歌

毎朝喇叭が鳴る、  
嚙唳として耳が繪をかく、  
どこかで梅の花がひしびし開く  
街には旗が立つ。

毎朝新聞の大きな活字がふえる  
躍り上るくらゐ大きな活字だ、  
活字は燃えて火になる、  
その一つはみそらで星になり、  
街では母親の懷中で温まる。

毎朝喇叭が鳴る、  
喇叭のなかで歴史が身じまひをする、  
玲瓏としてえもいはれず美しい。



昭南島の海底に

きりきり舞ひをして沈み込んだ

イギリス製の時計の一つが

鱚や鮪のまくらになる。

海の底まであかるい火砲の明りが消え

戦ひはかちどきを上げて静まつた。

毎朝喇叭が鳴る、

國民學校の登校時間だ、

お勤人は出かける時だ、

學生は霜にやけた頬を光らす。

街では店の戸ががーんとあがる。

喇叭の中は鏡のやうに光る。

そして梅の花が枝の裏表でひらく、

障子まで刃をあつめて光つて見える。

朝の日本の何と美しいことよ。



今年の春

マレーは陥ち

グアムも陥ち

香港も陥ち

そしてシンガポールへ

兵隊さんが進撃をはじめると

日本の庭にある

白い梅がひらきかかり

春はそろそろ始まりかかった

砲火はシンガポールへ

シンガポールへと集撃される

砲火はつひに

シンガポールをおとし入れた

シンガポールに日の丸の旗が立った

そして日本には



かつて見ないやうな春が  
びかびかに光つた春が来た  
どこにも  
どこにも  
いくさに勝つた人の顔があり  
どこにも  
どこにも  
櫻はいちめんに開き出た  
一生に一度くらゐしかないやうな  
りつぱな今年の春よ

兵隊さんたちにつたへてくれ  
日本の櫻と梅の花は  
今年はいつもより花が大きく  
枝いつぱいに咲いたと  
心あらば  
春よ  
みんなにおつたへしてくれ



夜半の文

はるは一瞬のうちに來た。  
そしてはるは一瞬のうちに去つて終つた。  
はなびらは

人のこころにとどまるひまもなく  
埃にまぎれ  
空に吹かれて消えた、  
しかも暴風はけふも巷に吼え  
人の途絶えたあなたを捲いてゐる、



人びとは耕さなければならぬ。

種子を蒔かねばならぬ。

この都にはもう空地も遊ぶ地面もなす、

ぎつしり青い菜を詰め込んでゐる。

女の人の指には指輪が見えない、

女の人達が種子を蒔き又耕してゐるのだ、

みなづきに食<sup>お</sup>すべき瓜はも、

莢<sup>あ</sup>るんどう下がる蔓<sup>ま</sup>べに、

人參も榮ゆる色つや、

あはれ <sup>い</sup>すこやかにと戦<sup>いくさ</sup>場に

夜半は文かくとこそ傳へめれ。



女性大歌

かぐはしや遠き代のすがた、  
おもひめぐらせ日の乙女、

おもひめぐらせ山吹の  
花のもとえに書きしるす  
歌をいのちにまもりたる  
鏡も匂ふ萬葉の  
大和の母もみそなはせ。



大和の母もみそなはせ、  
戦ひ勝ちて南洋の  
もろ國おさめ廻かにも  
日のみ旗こそ輝けり。

日のみ旗こそ輝けり  
日の本まもるをみなぞわれら  
日のもとの乙女ぞわれら  
日のもとの母たるわれら  
こぞりつくさむ日のもとに。



すめらぎのははなりわれは  
すめらぎのをとめぞわれは  
すめらぎのまもりぞわれは  
すめらぎのまもりのははぞ  
すめらぎのおもきにつかん。  
をみなゆえ<sup>つる</sup>劍はとらず  
いくさにはゆくことなけれど

おさなかる子をまもりて  
おさなかる子ををしふる。  
ひのもとのをみなぞわれは  
ひのもとののははなりわれは  
ひたすらにいへをまもりて  
すめらぎのおもきにかん。







さけがたきもろもろの哀歌

哀  
笛  
集



さしはたきもくもりの哀憐

一  
よもすがら  
九首



庭深く

煌々と灯を點けにけり

こよひひと夜の

いのちまもらむため

庭深く

煌々と灯は點けにけれ

死とすれすれの

人をまもらむ

ひと夜さを

死に絶えゆかむ人ひとり

息づきさこゆ

夜の深きに

庭深く

われよもすがらひと夜さを

生きなむとする

ひとりをもれり



死とは死とは  
かかる夜半にもおとづるか  
死の正體を  
見んとすわれは

わが庭の  
石佛群も静かなれ  
なれらにいのる  
こころとてなき

隈もなく  
庭のあかりを見入りつつ  
なにか我は  
捕縛せんとす

死とあらがひ  
生きなんとする人のする  
欠伸ばかりの  
夜は明けんとす







ひそかに

生のびし妻を玻璃戸ごし

見入らんとす

庭の冬ふかく

生のびし

呼吸づかひはもよはけれど

生のびしことの

信じられにけり

生のびし

欠伸はあはれ絶えまなく

生のびしことを

冷笑ふにやあらなむ

死をあびて

人ひとり生のびにけり

いかなるものを

見しかなんぢは



死をあび  
死にあらがひ  
顔をしがめつ  
かへり來にけり

腦溢血の

腦のこと我はえしらず  
死をあびしことは  
ゆめうたがはずけり

腦溢血の

ひとと思はず丹の頬には  
しばらくのまに  
死のかげの打つ



三 静か居 六首



ひそまりて己れを知らず  
己れ知るまでの  
いみじさよ  
汝とともなれ

六首

生き死の  
さかひ見しゆゑ静か居の  
遙けき思ひ  
辿りみるかな

ひそまりてあたまのありか  
じばし見えざれ  
まなこは何を  
みいるともなき  
ひそまりてしろきをんなも  
眼にすぎぬ  
ひそまれば何ぞ  
かかづらふことの多き



ひつそりと芥川龍之介の  
丈たかき歩みも  
冬日のあなたに  
消えゆきにけり

いつさいの  
ものみな生けり生けることの  
いみじきかなや  
大き呼吸つく

野のものゝ歌



野  
人  
生  
計



歴史の祭典

皇紀二千六百年奉祝日に

諸々の石の器には  
彫りもののあとさへ遠く、  
遠いといふことの奥さへ

秘色が神さびてゐる。  
かうもあつたらうかと貝殻を耳にあてて、  
何かを聴き澄まさうとすれば  
遠い世の海べに  
あけがたの波の音がする、  
日はまもなく燦として昇るのだらう、  
唼々と波の穂がそまる。  
波の穂が鯨のやうに躍る。



けふも遠い世を、  
遠い世のありさまをおもふ  
思うても遠い世  
心がとどかないほど永遠無類の世、  
渺として果すら見えない、  
だがすぐ僕の近くにもある、  
近くに山が聳えてゐる、  
山の深さはそのまま遠い世に續いてゐるのであらう、

遠い世のそよ風が吹いてゐるのであらう、  
だから雑草は香氣を變へはしない、  
僕は雑草に手をさはる、  
雑草はかみの毛のやうに柔らかく  
僕のでのひらにじやれる  
僕は軋轉たる何かを見ただらうか、  
僕は何かにさはつて知つただらうか。



僕の五十年前は赤ん坊だった。  
赤ん坊はたうとう死ななかつた。  
赤ん坊はおへそをふくらがし  
圖々しくも永く生きて行つた。  
間もなく赤ん坊が赤ん坊を生んで育てたのだ。  
そして彼等が五十年生きるとして  
僕の五十年を合せて百年になるだらう、

百年経てば歴史が編まれる。  
歴史の文字は金色や臙膩色に輝くだらう。  
歴史のあひだに日は昇つて行き  
月は女の人の顔のやうに漂ふだらう。  
僕は聽て僕の歴史のあひだから展望した、  
波の穂にをどる鑑粉のごとき金の日の色、  
遠い世の生きたすがたを。



そして僕は凡て知るべきことを知つた。  
僕は自らの愚昧さから凡てを知つた。

それは神々の間に爲され  
神々の勁悍な行ひのなかに續けられた  
山も海も神々のものであつた。  
遠い世といふことは今とは渝りはない。

みな續いて聳え唳々として鳴る、  
そして人びとはみな生きてゐるのではないか。  
祖先のいのちのありかが、  
我々のいのちの窗の中から見える、  
ありありと見える。



### 希望の正體

正體の見えない奴ほど怖いものはない。  
人生に希望といふものがある。  
これなんぞは正體が何時もまる見えだ、  
いい加減な胡魔化しの向側まで、  
観工場の雑鬧のやうにまる見えだ、  
希望も何もない廣大無邊の中で、

僕はともかく幽かながらも生きて來た。  
運が向いたところでやつと僕は希望を持ったのだ。  
それまで僕は異體の知れない人間だった、  
ところが皆さん  
このごろの僕は正體がまる見えなんです、  
僕のあばらの骨の瘡せてゐるのまでまる見えなんです、  
正體の知れないころの勇敢な僕よ、  
無作法でどこでも通つたころの僕よ、  
希望なんぞ薬ほども考へなかつた僕よ、  
お前は多分、犬にくはれてしまつたのだらう。



きりぎりす

その一

ことしまたきりぎりす一羽  
町よりもとめつ  
机のかたへには置きたり、  
思ひもかけぬ夜半に  
なんの思ひをつづるや、  
きりぎりす不意に啼きつるなり

その二

ひとかごにきりぎりす二羽  
いづれ兄とも弟とも  
分ちがたけれど  
ともあれ入れまゐらせそゝあひだ  
夏のうたてき午さがり  
軒につるして聞きたまへ。



磯

濱

去年、あきかぜ静かなる日、

我、友とともに磯濱を車にて過ぎたり。

磯濱は暮鳥の住みしところならずや、

暮鳥の住みし家は、何處ならん、

町なみの家の幾つかに、

障子戸白く椽くろずみたる家を見たり、

少女のおはじきして遊べるを見たり、

暮鳥住みし家はあんな家にあらずや、

我、友にかく言ひて過ぎたり。

波は穩かに屋後にさこえ、

松は往還に青く、

人はあらず我が車は過ぎたり。



天才の世界

或る詩人は君のことを  
天才の出来損ないだと云つた。  
一生文學のなかに腕うでいて  
それゆえ一つの職業をもたず、  
また一冊の詩集をも編まず、  
人と人のあひだを流浪して亦顧みず、  
病んで故郷の山野に還り  
忽卒として天命を果した君、

そんな君は幸福ではないだらう、  
だが悪運強くきのふもけふも  
文を描いては市にひさぎ  
また恬として顧みたことのない僕、  
一體どちらが仕合だか判つたものでない、  
聲を限り笑ひに笑つて世を辭すべきか、  
ねばり強く生きて生き抜くべきか、  
そして君の分まで生きて行くべきか、  
だが君の方が身軽なことは實際だらう、  
もがきにもがいてゐる僕は少し荷が重すぎるのだ。



乳緑の古典

病院にひとつきゐて  
僕は杖をついて街にうかび出た。  
もう若葉だつた、  
鑑やすりで削られた春の

その迥か奥にあつた小さい乳緑の心しんが  
もうけぶりはじめたのだ、  
僕らのなつかしい古典が  
僕の弱りはてた頭にひらめく。  
僕は 大川端に出て  
石垣のうへに腰をおろした、  
ゆく水は悠々たゆたふことなく  
紙片かみのごとく鷗飛び交ひ、  
どこもかしこも若葉だつた、



僕は永い間何をしてゐただらう、  
僕は精神病ではない、  
いささかも精神病ではなかつた。  
だが僕はしじう精神的な地圖をひろげ、  
毎日それを眺めくらしした。  
彼處にも此處にも戦つた僕がゐて  
完爾して僕をむかへてくれた、  
ともしびのない廊下で

僕はかれらと會つたのだ。  
そして間もなく病院から僕はつき出された。  
僕は何かを携つて出た筈だ、  
それをふところに入れ  
杖をついて家へもどらうとする  
ふたたび僕は勢ひをとり容れねばならぬ。  
弱りはてた僕よ  
もうひと息だから歩け。



野に記されたもの

一疋の蟬がじいいと鳴き立つて  
天に向つて  
火の粉のやうに舞ひあがつて行つた。

そして間もなく  
つかれてぽとりと地のうへに落ちた。  
蟬は天にかぎりなく  
あんまり廣いので怖くなり  
羽根が萎えるやうな寒さが感じられ  
驚いて落ちた。



そしてこんどは木から木のあひだを飛び廻つた。  
どれだけ廻つても  
木のないところがなかつた。  
蟬はよろこんで飛び廻り  
うたをうたひつくし  
羽根のやぶれるまで生きてゐた。

だが、天に向つて  
きいきい舞ひ上つた恐ろしい日の  
その廣茫さが、蟬の頭にのこり、  
蟬の死んだあとに記されてゐた。  
野に、  
野の人の知れないところに記されてゐた。



乏しき青果をかざりて

冬深く

あるものは黄なる果のいろ  
形すぐれてまるきもの  
いまの世に

ありも絶えけるもの  
あはれ、きみがたまはりし名も文旦<sup>ほんたん</sup>  
けふも食はずして  
床のへにはかざり眺めけり。



えにしあらば

えにしなき人の物語、

けふもつづれば

わが越し方に似も似しものかな、

えにしなきともがらはいまいづこぞや、

黄なる衣つけ

紫なる衣つけ

はた蘇芳のいろの衣つけ

北海道に行き

死にはてしひと、

朝鮮はゆきつゝるに行衛知れざりし人、

えにしなきともがらはいまいづこぞ、

えにしあらばとはわが願ねがぎごとなれど

えにしなきひとびとらつゝるにえにしはあらざれ。



みみずあはれ

けふ はじめて  
みみずといふ生きものが  
めくらであることを知つた。  
この悲しい一つの出来ごとを知り、  
みみずを粗末にしてゐた僕自身を  
恥ぢるやうな思ひであつた。

庭では  
何處にも彼の姿が見られた。  
めくらはめくららしい方向にむかひ  
生きて行かねばならず、  
また這うて何處かに行かねばならず、  
彼を見ることが苦痛になつた。



野のものゝ歌

野のもの野のものゝと遊べり  
信濃の野のもの  
山形の野のもの  
加賀の野のもの  
武藏の野のもの  
南瓜ら打ちつれて遊べり

山をつくり  
谷をうがち  
小さきはお馬に乗り  
大いなるは馬になり  
わが蒐集せる南瓜ら遊べり  
わが秋の野の祭  
わが来る秋ごとの行事  
南瓜あつめて遊べり  
南瓜ら菊のごとく



南瓜ら姫のごとく  
それぞれの襷をつくり  
紋章をうがち  
剛直鋼鐵のごときもの  
山形の野のもの  
やさしくちひさき野の菊のごときもの  
信濃路にてみられるもの  
あはれ加賀のもの  
野の武士のごとく嘯ぶけり

うららかなる秋の日  
野のもの野のものと遊べり  
星のごとくならび  
甲冑のごとく立ち  
野のものらわが縁側にて遊べり  
打ちつれて遊べり  
われ かくのごときものと遊べり



蠅  
の  
歌



續野人生計



僕の庭

芽ばえの莢、 赭い夢のひげ、  
花といふ花の屑、 花の粉、  
ちりめんのやうに結んだ花びら、  
遅い椿、

ちぎられた花、  
葉のさけたもの、 葉の香氣、  
蝶、

飛ぶ蝶もなよらしや、  
芝生に糸屑が黄いろく、  
あやめは女客の靴に映ります。



僕  
の  
家

猫が二疋、黒いのとぶちのと  
女學生が一人、中學生が一人、

女中さんが一人、  
それから僕の奥さんが一人、  
庭は百坪、石塔、石佛、つくばへ、  
飛石が百枚、あとは松ばかり。



市井

なにごと起りけむ  
をみないたく怒りてあまたたび  
あるじをせめ  
あるじ困じていらへもあらず  
をみな客となり盃なめるわれに  
さこえがしに

はしたなく罵りていつ終るべくもなく  
あしざまに叫び  
おのれ弱からざるを示せり。  
われその聲をさき  
酒いよいよ美味く  
いよいよをみなさけび続けぬ。  
あはれかかる春の夜もあるにや  
春の夜かくてひと夜はふけゆけり。



行

春

けふ濛々たる南風登りて  
地の上なる花、花の屑、悉く舞へり、  
芽は一刻もやすむ間もなく登りて  
みな青き管のごとく伸びたり、

石は渴き  
蝶は喘ぎ  
雀の頭しきりに焦げたる色を帯ぶ、  
人の手は熱く  
あなうらまた熱して  
人はなにものかを擁せんとはせり。  
人はなにものかに憧れんとはせり。



げに濛々たる光景なるかな  
恐るべき逝春の一日なるかな  
石は渴き  
道路は白く  
夢は干からび  
人の心ものうく干瓢のごとく萎え  
南風登りてしばらくも憩む間なし。

皓々として光りて馳るもの。  
また蕭殺として例へば冬のごときもの、  
そのおもかげだになし、  
たゞ漠々漂茫、  
天日は熱く  
人は若葉のかげを求めんとして  
あつさ手足を伸べむとはするなり。



麗

日

松脂のごとく光れるもの遊べり  
よごれよごれて遊べり  
金のごとき腹をいだけるものら遊べり。  
手をあはせ  
手をすりよせ  
何ものかを拜まんとし  
うしろ脚にて翼の塵をはらひ  
燦として飛びかよひて遊べり。

その眼はあかく濁り  
悲しき幾多の斑點よりなり  
花々をかへり見ることなく  
嬉々として  
くそのうへにも遊べり  
くそはさびしき道路のかたへにひそまりて  
すでに鐵のごとく乾き  
風あらばともに飛び去らんとす  
されど嬉々たる歌ごゑの歌むことを知らず  
愉しさのいつ果つることも知らず



塵の果の勞

其處を出でて  
人の顔はあたらしくなり  
耳の毛は剃られ  
頬の谷間はあかるくなり  
刈られたる髪はすでに地の果に消え行けり。  
人の人といへるもの  
みなひと皮を剥げり、  
みなひと皮はがれてあたらしくなれり。  
其處を出でて

何處に往かんとするか、  
人の人といへるもの  
あるは嬌然としてほほえめり、  
あるは怒れるもののごとし。  
あるは生れ變らんとく  
朝に夕にその皮を削れり  
刃をもてがりがりと削れり  
ひげを削れり  
ひげと皮とは漠々たる風塵の中に  
あはれけふもまた名もなく消え行けり。



少年行

少年に示して

毎朝

學校に行つてゐても

何かちがふものがあるね。

去年と今年とよほどちがふね。

去年ぼんやりと見てゐた本にしる

運動にしる

遊びの時間にしる

何かちがふものがあるね、

考へ考へ讀むやうになつたね、

あそぶことを選ぶやうになり、

運動もただの運動でない、

戦争に役に立つやうなものから

選ぶやうになつて來たぢやないか。

彈といふもの



銃といふもの

劍といふものが頭をはなれずに、

戦争といふものを

僕らはちつと聞き入つてゐるね、

僕らの少年時代の

燃えあがるやうな大戦に、

僕らは生涯二度と會へないのだから

それを僕らは心に

心の歴史として覚えてゐようとするのだね。

君は毎日聞いてゐるだらう、

大砲のとどろく方向を聞いてゐるだらう

そして僕らの生れてゐる時代を

いつも新らしく知り盡すだらう。

全く何かちがふね、

去年と今年とはちがふね、

僕らの心のちがひは

僕らを益々

本ばかり讀んでゐられないやうに思はせ、



遊んでばかりゐては悪いやうに思はせ  
何かしたく  
何か考へたく  
何か早く大きくなりたいやうに思はせる。  
ぢれッたくなるね、  
けれども僕らは僕等らしく  
先づからだを鍛へるんだね、  
それを僕らの遠い日の活躍を、  
國家に約束するやうなものだね、

僕らは馳り  
僕らは飛ぶ  
僕らは相撲ふ  
そして僕らは弾ぢされるやうになり  
弾のやうになる。  
それが僕らのまもるべき  
健康の未來を約束するものぢやないか。







生  
ける  
鮎  
十首

山  
の  
し



山ざとの  
橋のたもとに  
家ありて  
かそかに暮らし  
立ててゐるかも

山ざとの  
古りたる家に  
夏されば  
蟬鳴き茶店  
いとなみにけり

山ざとの  
橋のたもとの  
茶の店に  
生きたる鮎を  
泳がしにけり

鮎生きて  
箕のもとに泳ぎゐれば  
夏も深める  
山のくろずみ



山ざとの

家々見れば

しばらくは

滞まゝゐたく

かそけかりけり

蟬なけば

蟬も嬉しき山ざとの

すずしき縁に

我は憩ひつ

かかる

かそけき暮しの

わがころに

はなれることなく

終日ありけり

かかる  
暮じのかそけさを

我は永く

哀しく

あこがれゐたるかな



哀

歌

しばらくは  
橋のたもとの  
古家に  
蟬なきしきり  
人はあらく  
夕あかり  
いまだ日暮れぬ  
梢には  
さだかならねど  
鳥のうごくも



街  
の  
歌  
九首



つゐに  
この少女も  
犯されてゐしか  
はたちにならぬ  
この少女はも

この少女の  
あかるみ荒び  
ゐたれども  
丹の頬はあはれ  
冴えてゐにけり

この少女の  
ひとみに  
ひとすぢの  
抗がへる光  
さしもすれども

いまは  
男を恐れ  
やちまたに  
呼吸をひそめつ  
生きてゐにけり



汝にかはり  
復讐してやらなむ  
あまたたび  
復讐してやらなむ  
かくわれの思へど

かくまでに  
人を悲しめる  
人間の  
あら魂のありか  
われはえ知らず

思ひ  
見よ

わがむすめに似たる  
この少女の  
起きも立たざれ

ふたたび  
この少女を  
見ることあらざれど  
復讐はきつと  
してやるべし



かく  
われの思ひは  
埒をも知らず  
文學はも  
われをすてるな

あ  
ら  
い  
そ  
集



あつちのこころ  
あつちのこころ  
あつちのこころ  
あつちのこころ  
あつちのこころ

乏しき炭火

十七首

あつちのこころ  
あつちのこころ  
あつちのこころ  
あつちのこころ  
あつちのこころ



夕寒く

乏しき炭守りにつつ

われはありけり

もろ手かざしつ

夕寒く

十廿音

ひつそりと

しぐるるものか枝枝の

つや消もゆかず

ぬれそめにけり

夕寒く

硝子を透ける松が枝に

日はこぼれぬて

葉はもふるへり

あらいその

いその巷にまんまるさ

まなこをもちて一人の

人のゐにけり



かくまで  
憔悴るるものか一人くむ  
わぎ家のわれは  
膝をくづさず

憔悴れはて  
明りも痛き夕寒に  
ひとり酌み行き  
はてし知らざれ

こよひはも  
街には行かず一人くむ  
酒のうましもよ  
酒の哀しもよ

うからみな  
びあのひきゐる隣間に  
やつれも果てて  
酒くむわれは



あらいその

巷のいそのはやてより

はやさくるまを

かつ飛ばしつ

眼も見えぬ

酒の遠くにうき友の

まなこはかつと

輝きにつ

夕寒く

乏しき炭火守りにつ

ひそかに思へ

ひとの身のうへ

夕寒く

ひとつ思ひのたかまりて

せむ方なしや

ひと呼ばむとす



松の葉の  
日かげまもなく暮れにけり  
暮れしかなかを  
ただに歩みつ

あらいその  
巷も更けし西銀座に  
まなこをとぢて  
うごかざりけり

命はも

いまはあらざらむうき友と  
眼の見えぬまでに  
酒のみにけり

かつとして  
まなこみひらき見しものは  
おのれくゆらす  
煙草ぞあはれ











